



## 感覚刺激を伴う遊びと自発的意欲の形成： 自閉的傾向のあるA君とのかかわり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-27 キーワード: 作成者: 林, 伸恭 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008045">https://doi.org/10.32150/00008045</a>

## 感覚刺激を伴う遊びと自発的意欲の形成

### —自閉的傾向のあるA君とのかかわり—

Playing with Autistic Child: the Use of Sensory Stimulation for the Formation of Spontaneous Will

林 伸恭 (Nobuyasu Hayashi) \*

1998年5月から12月までの6ヶ月間自閉的傾向のあるA君と家庭において学習や遊びでのかかわりを持った。そして感覚刺激を伴う身体運動を中心とした遊びを重点的な柱として取り組んだ。

家庭にあるおもちゃや公園の遊具などを用いて前庭覚や触覚にかかわる刺激を与えることによって、A君はより大きな刺激を求めたり、遊びに興味を持って積極的な意欲を示すようになってきた。

(キーワード: 遊び 感覚統合 感覚刺激 身体運動 対人関係 発達段階)

#### 1. はじめに

私たち人間は、成長の過程においてその環境から多くの事を学ぶ。とくに乳児期から幼児期にかけては、環境とのかかわり一つひとつが子どもにとって大きな意味を持つ。エアーズ (1979) は、この時期の感覚統合の発達過程を4段階に分けており、第1段階から第2段階にかけては、触覚・前庭覚・固有受容覚の重要性をあげ、それらが相互に統合し、さらに視覚・聴覚とも統合される事によって、より高次の発達課題が達成されるとしている。そして、このような感覚統合は、遊びの中でなされる事が多く、自らの身体図式を築いていくことがさまざまな発達に結びついていると考えられる。

本研究では、心身に障害を持つ子どもの場合、遊びの中でいろいろな種類や強弱の感覚刺激を経験する事により、運動感覚や対人関係がどのように発達するかについて、A君との事例を通して考察する。

#### 2. A君について

##### (1) 生育歴

1991年5月生まれで、1998年12月現在7歳、小学1年生である。3歳児検診の際に自閉的傾向と診断される。1994年4月から1998年3月まで障害幼児通園施設みどり学園に通う。1998年4月、市内のB小学校に入学し、同時にC小学校の情緒学級に週3回通う。

##### (2) 親学級での様子

10月29日にB小学校の親学級の様子を観察させていただいた。学級全体に対する担任の指示については、自分に言われていることだという意識がうすいようで、伝わりにくい場面も見られた。周りの子ども達の発表は聞いているようで、自分のやりたいこと(興味のあること)を聞かれると手を挙げて同じ意見を繰り返した。授業中は離席することはなかったが、時間がたつと集中力が続かないのか、片肘をつくなど姿勢が悪くなる場面が多く見られた。算数の計算練習の課題が与えられるとそれに取り組んだ。休み時間は友達に手を引かれてグラウンドに出たが、友だちとはかかわらず、自分のやりたいことをして遊んでいた。授業中も休み時間も周り

\* 北海道教育大学旭川校特殊教育特別専攻科

の友だちがよく面倒を見てくれているようだった。

### (3) 情緒学級での様子

B小学校の情緒学級での様子については、8月24日から9月6日の間、筆者が教育実習生として配属されたため、十分に把握することができた。はじめの会でその日の予定を確認するとともに自分の頑張ることを決め、取り組んでいた。また、学級では個別の学習の時間を設け、個に応じた指導を行っていた。決められた流れの中で学習活動が進められており、A君もその流れに従って活動している。個別の学習では、国語や算数など親学級での学習内容に即した課題にしっかりと取り組んでいる。児童数も少なく教師が個別にかかわることのできる時間が多いためか、親学級での状態と比べると集中力も持続するようである。

## 3. 実践の課題と時期区分

### (1) 実践の課題

かかわりを持ち始めた5月時点でのA君の実態をふまえ、運動感覚の発達が全体の軸になると予想し、以下の3つの課題を設定した。

#### ①運動感覚

運動面では、けんけん・スキップ・ギャロップなどはできるものの、投げる・受ける・蹴るといった“物”を使った動作は困難なようである。体力的にやや劣る面もあり、遊びや散歩の後には疲れた様子もうかがえる。一方、ぶらんこ・すべり台などの遊具が好きで一人ででも遊んでいる。

そこで、外で遊ぶことを多くし、広い場所で走ったり跳んだりしながら体力の向上を図るとともに、ぶらんこやすべり台などでは定まった一定の遊び方をするのではなく、いろいろな遊び方をして前庭覚を刺激するよう試みる。また、身体接触を多くし、触覚や身体感覚に快い刺激を与えるような遊びに取り組む。

#### ②対人関係

コミュニケーションなど対人関係の面では、

話し相手と簡単なやりとりはできるものの、問いかけや指示に対する反応が遅かったり、集団の中でも独り言を言ったりすることがある。遊びにおいても一人遊びになりがちで、周囲の人が気にならなかつたり、ルールを理解できない。

そこで、話し相手や遊び相手との関係を認知し、その相手とのかかわりを多くするとともに、大勢で遊ぶ中でルールを理解させるような働きかけを行っていく。

#### ③学習課題への取り組み

学習面に関しては、母親の指導もあり、平仮名・片仮名が読め、10前後の数のたし算・ひき算ができる。大小や長短の比較や簡単な文章を読むことができる。しかし、複文になると混乱する場面も見られる。

そこで、学校での学習内容に即した内容で、漢字の練習や繰り上がりのあるたし算、繰り下がりのあるひき算、文章問題を解くと同時に、文章の読み取りや理解の援助、作文指導などを行っていく。

### (2) 実施期間と時期区分

5月26日から12月26日までの計34回の実践の中で、自発的な要求が多く見うけられた時期を境に前期と後期に分類した。

①前期…5月24日から10月19日まで計20回

②後期…10月24日から12月26日まで計14回

詳しくは別表を参照いただきたい。また表には特記事項のみを記した。

では、以下課題毎の実践の様子を示す。

## 4. 運動感覚

第1回目から第8回目までの5月から6月の間は、公園にある遊具をそのまま使って遊んでいた。6月29日にはすべり台を反対から(すべる側から)登るといった遊びをする。この後、すべり台では後ろ向き、うつ伏せの状態、立つなどしてすべっていたが、その場合は筆者の上座に座って一緒にすべった。9月7日になると、後ろ向きの状態で1人ですべることができた。

4人掛けのぶらんこでは、6月中は一緒に乗って揺らしてもらっていたが、7月13日には大きくではないが1人で揺らすことができた。

10月12日にはぶらんこの鎖をねじって回転させる遊びを、他の子を真似てやらせてみた。回転による遠心力を楽しんでいるようだった。はじめのうちは、1人でねじる事はできなかったが、何度かするうちに少しだけではあるが、自分の力でねじれるようになった。

後期の実践では、11月2日、9日に行ったくすぐり遊びや空中遊泳（体を持ち上げて上下左右いろいろな体勢をとる遊び）など、直接体に触れたり逆さにしたり横向きにしたりして刺激を与えた。前期に比べると、与えられた刺激は直接的でしかも強い刺激であったと言える。この強い刺激は、A君にとって非常に快いものであったのだろうか、笑顔が絶えず見られ、何度も同じ遊びを求めた。この後、これらの遊びをほぼ毎回要求してくるようになった。

## 5. 対人関係

全ての時期を通して、A君は周囲で他の人が何をしていてもあまり気にする様子は見られなかった。たとえ隣で同じことをしていても、自分のしていることを繰り返し行っていた。

その反面、7月1日には筆者が高鉄棒にぶらさがっているのを見て、自分もすると行ってぶらさがったり、11月13日には筆者がおもちゃで遊んでいると、そのおもちゃを取り上げて自分で遊ぶというように、筆者のしている事に対しては自分も同じ事をしてみたいという意識が伺える。後期に入るとこのようなことは頻繁に見られた。一人で本を読んでいるときなどでも筆者のことが気にかかっているようで、時々こちらの様子を見ているようだった。自分の生活空間の中にかかわりを持った筆者が「存在」しており、そのような人には目を向け、意識することができているように思われる。これは家の中という二人でいるときにだけ見られるの行動ではなく、公園など他の子がいても見られる行動

であった。

家の中にあるおもちゃなどの操作や手順は理解できているようで、正しい遊び方で遊ぶことができる。しかし、かくれんぼでは、鬼になって探すことはできるが、隠れる事はできなかったり、追いかけてこでは後について追いかけることはできても、捕まえたり、逃げたりすることはできないなど、遊びのルールという点では、まだ理解されていない部分が多いように思われる。

このような行動は一般には3歳児の発達段階で見られる点であり、とくに人とかかわっての遊びでは、役割分担（隠れる側と探す側など）の理解が困難なようで、一緒に遊んでいる人と同じ行動をしようとする。また、勝敗の決定するような遊びでは、10月10日に行った砂場のふち渡りで「ここから落ちたら負けだよ」と教えるが、自分の方からわざと落ちて「Aの負け」と言ったりする。勝ち負けがあるということ、勝つのほうが良いということはわかっているようだが、大きなこだわりもなく勝っても負けてもにこにこしている。説明による指示は聞いてはいるが、理解という点では難しいように思われる。

## 6. 学習課題への取り組み

学習課題については、母親が準備したプリントや学校から渡された宿題に取り組んだ。第1回目から、計算練習や文字の練習、漢字の書き取りなど、ほとんど間違えることなくできており、9月7日に見られるように机上のプリントをすらすらと解くということがしばしば見られた。

最近では、学習に慣れてきたためか速く書こうとして字が雑になってきており、中には読み取ることの困難な文字もある。そのような場合は「ゆっくり」と声がけをしたり、手を支えるなどの援助によって、丁寧に書くことができる。ドリル的な学習内容ならば繰り返し練習しており、現在の授業にもついていっているようであ

る。

しかし、文章の読解に多少の困難が見られ、9月9日に行った文の並べ替えの問題では、並んでいる順に読み上げてしまい、間違っていることを示すとパニックを起こしそうになったり、10月12日には、算数で問題文の意味が理解できず泣きそうになったこともあった。また、一度書いた答えは、間違っているにもかかわらずそれに気付かないことが多く、もう一度はじめから考え直さないと正答は得られないこともあった。今後の学習内容では、複雑な文章もますます多くなり、さらに多くの困難が生じてくるのではないだろうか。

## 7. 考察

8ヶ月に及ぶ実践の中で、A君は様々な変化を見せてくれた。自閉的傾向をもつ子ども達は指示待ち人間になりやすいということが言われている。A君は、最初の時期は「何する」「どこちに行く」などの質問に対しては、自分のしたいことや行きたい場所などは言えるものの、自ら会話を始めるようなことはあまり見うけられなかった。ところが、様々な遊びを通して触角や身体感覚にある程度強い刺激を与えていくことにより、筆者からの言葉掛けがなくとも「こちょこちょゲーム（くすぐり遊び）する」など、自発的な要求が見られるようになってきた。これは、その運動自体がA君にとって大変快いものであり、その感覚を楽しみたいという強い意識から出た言葉ではないかと考えられる。この他にも、ぶらんこでの回転遊びや空中遊泳などについても、何度も強く要求してくるという場面が見られたことから、感覚刺激を伴う快い遊びを通して、自発的な要求が出現したと考えられる。

また、遊びの中では一人遊びが多いものの、筆者のしていることには興味を持ち、鉄棒にぶら下がったり、おもちゃを取って遊んだり、同じことを試みる場面も見られた。このように、A君自身にある程度かかわりのある人には、興

味を持つ事もあるようだが、他の人には、まったくと言ってよいほど興味を示していないように思われる。もっと周囲の人たちともかかわれるような環境作りをすることによって、対人関係において、さらなる発達が期待できるのではないだろうか。

体力面では、鉄棒にほんの数秒しかぶら下がってられないなど多少劣る面が伺えるが、公園などの外で遊ぶ場合では、遊具で遊んだり走り回ったりとじっとしていることもほとんどなく、公園に行くまでの道のりも走っていくことから、徐々に体力もついているのではないかと考えられる。

子どもは遊びを通して大きく成長していく。ところが心身に障害を持った子ども達の中には、幾つかの遊びだけを繰り返して楽しんだり、自分で新しい遊びを考え出したりすることが困難な場合がある。8ヶ月間にわたってA君とかかわりを持ち、遊びは子どもが成長していく上でなくてはならないものであると感じた。遊びの中で体の使い方を知り、そのルールの中で対人関係を築いていく。とくに相手との関係が必要となる遊びの展開が重要な役割を果たすと予想される。今回A君とのかかわりにおいて、さまざまな感覚刺激を伴う遊びを通して感覚統合を促すことにより、子どもはより積極的に自発性の出現、さらには、より高度なコミュニケーション行動の確立が望めるのではないかと考えられる。

## 8. おわりに

心身に障害を持つ子ども達は、知的な発達面においても遅れている場合がある。学校によってはフリーの教員を設置するなどにより対応している。家庭においても知的な発達ばかりでなく、今回筆者がかかわったような形で何らかのサポートが求められているといえるのではないだろうか。そして、子どもから大人まで社会全ての人がこのような子ども達のことを理解し、信頼関係を築いていく事が、子ども達の発達を

目指すうえで望ましいと考える。A君が筆者に接してくれたのと同じように、障害を持つ子どもたちがより多くの人と接することのできる環境作りを期待したい。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたり、5月からお付き合いをいただいたA君とその御家族、B小学校の先生方や親学級の子ども達、情緒学級の先生方には大変お世話になりました。そしてお忙しい中ご指導いただいた内島先生、古川先生と専攻科の皆様方に感謝致します。

#### 文献

1) 佐藤剛・土田玲子・小野昭夫 (1996) : み

んなの感覚統合—その理論と実践、パシフィックサプライ株式会社

2) A. J. エアーズ 佐藤剛訳 (1982) : 子どもの発達と感覚統合、協同医学出版社

3) 小林 重雄 (1997) : 応用行動分析学入門、学苑社

4) マリアンヌ・フロスティック 肥田野直訳 (1978) : ムーブメント教育—理論と実際—、日本文化科学社

5) 小林芳文・當島茂登 (1992) : 学習困難児のムーブメント教育、日本文化科学社

6) 汐見稔幸・勅使千鶴 (1992) : 年齢別保育実践シリーズ・保育園編 2歳、3歳、労働旬報社

別表 A君とのかかわり

	月	日	運動感覚	対人関係	学習課題への取り組み	自発的行動
前          期	5	24	公園に行くとき走っていく	じゃんけんで順番を決め、それに従って遊ぶ		公園まで走る
		26	すべり台、ぶらんこで遊ぶ			
	6	1	うんていにはぶら下がろうとせず上を渡る		ひらがなカタカナの練習	うんていの上に登る
		10	キャッチボール(サッカーボール)では腕と胸を使ってうける			
		13				
		15				
		27				
		29	自転車をこげない すべり台を反対から登る	他の子と同じ遊びをするが順番を待てない		すべり台を反対から登る
	7	1	自転車を押しているときにハンドルが変な方向に向き転ぶ	転んで痛いとき、「びっくりした」と言う		高鉄棒にぶら下がろうとする
		11				
	13	高鉄棒にぶら下がろうとする 4人がけのぶらんこを一人で揺らす事ができた				
8	10	すべり台で後ろ向き、うつ伏せ、立つなどして一緒にすべる	近所の子がいるが気にせず遊ぶ 一緒にすべろうと言う			
	17			算数の文章問題を解く		
9	7	すべり台を後ろ向きに一人ですべる		机上のプリントをすらすらと解く 文の並べ替えは困難	すべり台を後ろ向きで一人ですべる	
	9		かくれんぼでは探せるが隠れられない			
	14					

	10	3 10 12 19	ぶらんこをねじって回転させて乗る	他に小さい子がいたがすべり台の順番も気にならない 「Aの負け」と言ってわざと負ける 同じ遊びをしている子がいたが気にしない	作文では、質問された事の答えを指示に従って書く 算数で問題文の意味が理解できない	ぶらんこをねじって回転させて乗る	
	後 期	10	24 26	自分で4人がけのぶらんこを揺ろうとするが大きくならない	追いかけっこでは後について走る事はできるが捕まえたり逃げる事はできない	字を書くとき支がないと雑になる	4人がけのぶらんこを揺ろうとする
		11	2	ぶらんこを揺らしながら立ちあがる	プリントをもう少ししようという「3枚する」と言う	算数で一度書いた答えは正しいと思いい度も同じように答える	ぶらんこを揺らしながら立ちあがる
9			くすぐり遊びをする 空中遊泳をする	くすぐり遊びを求める	くすぐり遊びを求める		
13			野球(バッター)ではボールを打ち返せなくなっていた	林の遊んでいるおもちゃを取って自分も遊ぶ絵を描こうと誘ったが嫌だと言った	くすぐり遊びを求める		
16				くすぐり遊びを何度も求める	くすぐり遊びを求める		
25							
12	7 11				漢字の練習では画数を数えながら書き、林にも確認させる		
	14		テレビの主題歌を自分一人だけで歌おうとする			テレビの主題歌を歌う	
	21		本を読んでいる隣で遊んでいるとそれに加わろうとする				
	22						
	26	授業でスキーの練習をする	食べ物のおもちゃを使って料理の真似をする				